HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	精神疾患における日本の臨床現場で実施可能な社会認知機能検査の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	秋山, 久
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第16054号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92755
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	AKIYAMA_Hisashi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　秋山　久

	主査	教授	藤村　幹
審査担当者	副査	教授	矢部　一郎
	副査	准教授	乗本　裕明

学 位 論 文 題 名

精神疾患における日本の臨床現場で実施可能な社会認知機能検査の検討

(A study of social cognitive measurements for psychiatric disorders in Japanese clinical practice)

申請者は精神疾患における社会認知機能に着目し、統合失調症における社会認知機能の定量的評価を行い治療につなげることを目標に、症状の安定した統合失調症患者121 名を対象に予めエキスパートパネルで選定した 9 種類の社会認知機能検査（日本語版）を施行し 70 名の健常人と比較検討した。病状の安定した統合失調患者としては、評価時の主診断が DSM-V の統合失調症に該当し、過去２カ月にわたって入院歴がなく、過去６週間にわたって向精神薬の種類に変更がなく、過去２週間にわたって向精神薬の用量にも変更がない 20 歳から 59 歳の患者を対象とした。主要評価項目として階層的重回帰分析により社会機能の増分妥当性を検証し、副次評価項目として各社会認知機能検査の信頼性・妥当性および社会機能との関連も検証した。社会認知機能検査としては、the Bell Lysaker Emotion Recognition Task (BLERT), Facial Emotion Selection Test (FEST), Hinting task, Metaphor and sarcasm scenario test (MSST), Ambiguous Intentions and Hostility Questionnaire (AIHQ), Intentionality Bias Task (IBT), Social Attribution Task-Multiple Choice (SAT-MC), SAT-MCII, Biological motion task (BMT)を選定した。結果として患者群と健常者群との比較において、ほとんどすべての検査において患者群で有意に成績が低かった。特に神経認知機能の影響を考慮した上で、Hinting task の社会機能に対する増分妥当性が認められHinting taskの良好な計量心理学的特性が確認された。またその他の神経認知機能検査についても再検査信頼性が確認された。本研究で新たに日本語版を作成した検査方法を含めて、日本語版の各検査の特徴が明らかとなり、いずれの検査も 15 分以内に施行可能であることを考慮すると日本の臨床現場で実施可能と考えられた。本研究により各社会認知機能検査（日本語版）の信頼性と妥当性が確認され、統合失調症患者の社会認知機能障害に対する治療法の開発を考えるうえで示唆に富む重要な結果と考えられた。

審査にあたり，まず副査の矢部教授から患者選択に関連して、MMSE などの神経心理学的検査で同等の神経認知機能の患者同士で比較しようとは思わなかったか、との質問があり、申請者は十分な患者数を得るために今回は統合失調症の症状の安定した患者との条件で患者選択を行ったことを返答した。また統合失調症以外の疾患に関してはどうか、との質問に対して申請者は双極性障害やうつ病においても社会認知機能の評価は重要であり今後の検証が必要であると返答した。次に、今回施行した検査方法は評価者の側のバイアスは生じ得ないか、との質問に対して申請者はほとんど排除できるがHinting taskに関しては採点基準において多少のバイアスが生じる可能性があることを返答した。さらに、今回の研究を基本に日本初の新しいスケールを開発する

予定はないか、との問い対して申請者は社会認知機能評価のゴールドスタンダードを確立することが目的であり新規スケールの作成予定はないことを返答した。

続いて副査の乗本准教授から,、本研究の目指すところについての質問に対して、まずは日本における臨床で役立つ社会心理学的検査を確立することが目標であり、その先には国際治験なども念頭に置いた国際統一基準を確立したい、と申請者は返答した。続いて施設間における診断のバラつきの可能性についての質問に対して申請者は、今回は統合失調症の診断基準を明確にしたためバラつきの可能性は低いことを返答した。論文の書式について、８ページ「目的」の最後の１文は重複があり削除可能であろうとの指摘に対して申請者は同意した。２５ページの末尾８行目における「文化差を解消した」との記載は「文化差を排除できた」への修正を勧められた。

最後に主査の藤村より、タイトルが「精神疾患における..」となっている一方で論文内容は統合失調症に限定しており、双極性障害やうつ病での研究も進めているのか、との問いに対して申請者は、現時点では統合失調症に限定した検討を行っているが将来的に他の精神疾患で検証する価値があることを返答した。また今回の研究では除外した重症の統合失調症に関してはどのように考えるか、との質問に対して申請者は重症例では検査の信頼性も低く、むしろ治癒期で社会復帰を前にして症状が軽減した患者において社会認知機能の評価は重要であると返答した。目標症例 140 例に対して今回 121 例の検討にとどまった点については、概ね目標症例に達しており十分な患者集積ができた点を申請者は返答した。

審査員一同は，これらの成果ならびに審議内容を高く評価し，大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ，申請者が博士（医学）の学位を受けるのに充分な資格を有するものと判定した。